



話題の本棚

マシュー・ホンゴルツ・ヘトリング著、上京恵訳『リバタリアンが社会実験してみた町の話』
デヴィッド・ハーヴェイ著、吉原直樹監訳、和泉浩・大塚彩美訳『ポストモダンシティの条件』

特集／映画

新刊コーナー／新書コーナー／「私」の日記／「私たち」の手紙

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



univ.

京大生協

CO-OP

綴葉編集委員会

自由を突き詰めたらこうなった

リバタリアンが社会実験してみた町の話

自衛主義者のユートピアは実現できたのか
マシュー・ホンゴルツ・ヘトリング著

上京恵訳 原書房



かつて、コロナ前に『リバタリアニズム』（中公新書）という書
が出版され、そこでアメリカで試みられている「フリーステート」
運動が取材されていた。アメリカでは昔から政府などに頼らず自主
独立の精神で生活を送るという思想が大きかったが、近年、そのよ
うな習慣を実現しようとした町があったのだ。ニューハンプシャー
州のグラフトンはよく言えば自然と隣り合わせ、悪く言えば辺鄙な
片田舎の町である。以前より州政府や連邦政府からの統治・介入を
嫌い、町で自主的かつ自足的生活を維持していた。そこに、その自
由を自分たちの主義に適したものと感じたりバタリアンが移住して
きたのである。

その書ではリバタリアンの活動を評価する形で紹介していたが、
結局、「フリーステート運動」は頓挫したといっている。本書は
その答え合わせともいえるべき取材結果である。ただし、本書の
メインは次の部分だ。

クマ被害

日本でも最近では北海道で、ヒクマが都市の中にまで入り込んでく
るというニュースをよく目にするが、アメリカの田舎では本書の取
材時、およそ二〇年前にそれを経験していた。気候の関係で森に餌

がなくなつた時に、クマがグラフトンの町に出没したのである。本
書冒頭では外に放していた飼ひ猫がクマに襲われるというショッキ
ングな逸話が提示される。他にもゴミを漁りに来たクマと住民が一
触即発の事態に陥る、あるいは実際にクマに襲われて怪我をする事
態になった事例も挙げられる。その一方で、クマを餌付けする住民
もいることが取材を通じて明らかにされている。クマへの対処法も、
個人の行動への介入を嫌う住民の意向を反映して、結果して初期対
応をすることを怠つたようである。

インフラやサービスの縮小

日本だとこういうクマ被害には行政が対応し、またその対応が遅
れたり悪かったりすると批判が集まったりするのだが、グラフトン
では行政サービスを当てにできなくなっていた。というのは、リバ
タリアンも含めて町民が税金の支払いを嫌がった結果、行政側もサ
ービスを削減していったのだ。そして、起きたトラブルは「自己責
任」で対処しなければならぬ。その被害が誰に偏るか。はっきり
言えば「弱者」である。これと対照的なのが経済的に豊かな街であ
る。大学を擁するような街では、キャンパスにクマが出た際に行政
側が出動してクマを捕獲し、遠く離れた自然の中へと移送する対策
を取る余裕があった。グラフトンでは、最終的に住人たちによって
自警団的なグループが作られ、大規模なクマ狩りが行われたようだ。
ただし、法律から逸脱した形で。

自由の行使がどこまで許容されるのか、自由を成り立たせる基盤
に何があるのか、それを再認識させられる一冊である。（ねい）

（二八一頁 税込二六四〇円 2月刊）

現代とはいかなる時代か——ハーヴェイの名著、待望の新訳

ポストモダンニティの条件

デヴィッド・ハーヴェイ著

吉原直樹監訳

和泉浩・大塚彩美訳

ちくま学芸文庫



一九七〇年代、政治的、経済的実践、さらには文化的実践においても大きな変化が生じた。「ポストモダン」なる語で表現されるこの変化によって、現代はいかなる時代となったのか。この問いに取り組んだのが本書であり、一九八九年の刊行から三〇年以上経過している今でも、本書からの引用、本書への言及はされ続けている。

著者であるデヴィッド・ハーヴェイは経済地理学者である。地理学の理論研究、とくに都市論研究を行う中で、マルクスの経済理論を用いて、資本主義体制に伴う空間的矛盾や不平等を批判してきた。本書では、マルクス主義の諸概念を取り込むことで、ポストモダンの核心を資本主義体制の時間・空間的变化に見いだす。

六〇〇ページにおよぶ大著である本書は、四部で構成されている。まず第一部ではモダンからポストモダンへの移行を、建築や芸術、文学などの文化的実践を事例に説明する。ポストモダンについて考える上で前提となるようなモダン／ポストモダンの文化的実践の事例と、それに対する議論の流れが網羅されている。

第二部では、二〇世紀後期における資本主義の政治的・経済的変化を、「フォーディズムからフレキシブルな蓄積への移行」として

説明する。大量生産と福祉に基づくフォーディズム的な資本の蓄積は地理的に不均衡な発展と過剰蓄積によるインフレを招き、オイルショックによってとめを刺された。蓄積体制の再編を求められた社会は、最小限の社会保障と、一時雇用や外注を重視するフレキシブルな蓄積に移行する。細分化された小規模の市場の中で資本の回転が加速し、衛星通信と輸送コストの低下によって空間的な制約が克服されていき、この特徴を「空間と時間の圧縮」とした。

第三部では、「空間と時間の圧縮」が人びとの空間と時間の経験を変化させたことによって生じた、ポストモダンに特有の文化形態について論じている。空間的な制約の影響が小さくなると、空間の持つ異なるわずかな差異が強調され、結果として場所性が強化される。このように、空間と時間の特性はつねに資本による圧力にさらされ、混乱と不確実性をばらむものとなった。

第四部では、これまでの議論を踏まえて、ポストモダンにある種の歴史・地理的な状況＝条件として捉えることを試みる。

ポストモダンニティについて論じる本書は、二〇二二年を生きるわれわれに何を与えてくれるのか。それは、資本主義がもたらす変容を空間的に理解し、理論化する視点ではないだろうか。情報技術の進歩によって空間の圧縮はさらに加速している。

余談だが、二〇二二年現在、YouTube上でハーヴェイの講義を視聴することができる（これも空間と時間の圧縮によるものだ）。本書と共に、そちらもぜひおすすしたい。

（たいやき）

（六三四頁 税込二二〇〇円 6月刊）



夢の裏側に人々の奮闘あり

上質なシートに沈み込みながら、私たちは映画という夢に吞まれていく。そしてそれが作り物だということを忘れてしまう。催眠術師は眠りを妨げない。しかし醒めた目で文字を追う現なら、詐術も白日の下に晒される。エモーションの創出と持続

「観客の全神経をスクリーンに集中させる」ことこそ、ヒッチコックの駆使する映画の秘術なのだ。このようにフランスの映画人トリュフォーは、『定本 映画術』（晶文社）の序文に書いている。同書には一九六二年、彼がサスペンスの達人ヒッチコックに行ったインタビューがまとめられており、映画作家の術策が惜しみなく開陳されている。

手錠やナイフといった事件の小道具にはじまり、意表を突く配役、カット割り、メリハリを生むライトの仕込みから観客のお国柄まで、監督の気配りには終わりが無い。なるほどヒッチコック作品の多くは、異常性愛や殺人といった非日常を容易く観客の「自分事」にしてしまうが、それは無数の技術の上に成り立つ魔術の力であつたらしい。

映画の完成後も制作者の懸念は続く。サスペンスというB級ジャンルを手掛けるヒッチ

コックには、長らく不当な批評がついて回った。ときに興行成績が慰めとなるが、観客やスポンサーに媚び続けては作家として墮落してしまふ。観客を魅了し現場を操り、評価の声に立ち向かいながら、映画監督は作品を撮り続けなければならないのである。

政治権力に踏み荒らされようともただでさえ悩みの尽きない映画作り。ここに公権力の横暴が絡むと、一層の困難に直面しかねない。大戦中のヒッチコックは原子爆弾を小道具にしたことで、FBIに何ヶ月も監視された。以下では夢の工場が壊された事例として、「赤狩り」を取り上げたい。

『ハリウッド「赤狩り」との闘い』（大月書店）を紐解くと、この恐ろしい事件が弁舌さわやかに語られてくる。悪名高きマッカーシー率いる非米活動委員会は、一九四〇年代後半から五〇年代にかけて思想統制の恐怖を振りまいた。単に赤、つまり共産主義者を弾圧したのではない。右派以外ほぼ全ての人間を排斥する姿勢こそが、映画人達を苦しめた。

その一人チャップリンはアメリカ追放



の憂き目にあった。『ローマの休日』の脚本家ダルトン・トランボは、不当な罪状で投獄された。右記の概説書では彼らの苦闘が、その作品解釈と共に、著者の怒りを滲ませつつ取り上げられる。ハリウッドの重鎮であった彼らは、思わず目をそらしたくなるほど、一瞬で冷遇される。それほどまでに政界の面々は、夢の職人たちを政治的に重要視していた。映画は無数のスタッフが関わる集団作業の産物である。だからこそ、そこに赤狩りのような密告推奨の空気が流れては、夢幻の世界を産出することなどできるはずがない。ハリウッドの中には密告を行った監督、世情に流された監督がいた。逆に逮捕のリスクを抱えたスタッフとの絆を手放さない者もいた。本書を読めば、政治と映画の衝突が、逆に催眠術師たちの連帯を問うようにも思えてくる。

競争から信頼し合う共同体へ

ここまで戦後アメリカに限定し、作り手の側から映画の現場を見てきた。では現代の日本ではどうかと言うと、つい先日名にたる関係者らが、日本版CNC設立を求める声を上げたばかりである。映画産業のシステムをあらゆる面から支援するフランスの組織を日本にも、という呼びかけは、業界の持続発展を促すものとして期待が高まっている。

老若男女の賛同人が何を思い改革を提言し

たのか。その背景を知りたければ、『映画の声を聞く』（フィルムアート社）を手取るのも一手だろう。様々な制作スタッフによる早稲田大学での贅沢な講義が、この一冊に凝縮されている。大女優イザベル・ユペールの難解な言葉など見所は多い。そのうえ実践に即した発言も満載である点が、示唆に富む。日本映画界のエース西川美和は、恐らくヒッチコック以上に現場での交渉に苦勞した。

映画とは何か、映画を見るとは何か。

確かに映画制作には泥臭い努力と営みがある。その上で制作側ではなく、批評家の視点から映画をとりあげてみよう。リュミエール兄弟が映画というメディアを築いてから一世紀以上。この技術はなんなのか、何をもちろしたのか。ここではフランス映画思想史を概観しながら映画とは何かを考えてみたい。

バザンのリアリズム

こうした議論で最も参照されるのがアンドレ・バザン著『映画とは何か』（岩波文庫）だ。サイレント映画からトーキー映画の移行期に、映画の衰退が囁かれたフランス社会においてバザンはそれらの言説を批判していった。絵画や演劇と比較しながら映画の特性を

「若い頃は強くなきゃいけないという強迫観念もありました」。年長の男性に囲まれ、変化の多い子役に手を焼く。経験を積むことで頼ることを覚えた。「そういうことで周りの人が育つんです」。日本版CNCの理念に通じる教えが、ここに見出せはしないか。

催眠術師たちは泥くさい。万事に気をもみ権力と闘う。つまり映画とは、共同体の努力なしには成立しない夢なのである。（とゆへ）

記述しようとした彼の論考は、映画思想における古典であり今尚力を放っている。それが彼の「リアリズム」という概念だ。

「映画は現実を写し取る」という意味でリアリズムを語るならば多くの読者は「否」と答えるだろう。背景に揺れる葉叢に感動していた映画黎明期ならいざ知らず、我々の社会において映画は虚構であり編集でいかほどにも変更が可能なものだからだ。しかしバザンが唱えるリアリズムは、映画は現実を写し取るという意味ではない。

その言説を知るためには収録されている「完全映画の神話」から読むことを薦めたい。バザンによれば、プラットフォームの頃から私たちは

アイデアをもっている。観念の中に理想郷を持ち、それらをどうにか人に伝えようとしてきた。映画とは、観念を音・色彩・立体感を備えて外部化させる装置である。その時神話は現実となる。映画は現実を写しとる技術ではなく、観念を現実化させる装置なのだ。

バルトの美

こうして映画思想は一つの発展を見せる。その議論の中でもう一人紹介したいのはロラン・バルトだ。批評家・記号学者として紹介される彼は、文学・絵画・音楽など幅広い対象をその分析の対象としている。彼は言葉に対する信頼があり、一見言語化しにくいものをその構造に落とし込んでいく。

ここでは『映像の修辭学』（ちくま学芸文庫）に収録されている「映画について」に触れておこう。バルトによれば映画は言語化しにくい。言語は常に区分けを作っていくものに對し、映像は常に連続的で切れ目がない。映画を言語化するためには無理やり切れ目を入れなくてはならず、意味付けを行う必要がある。そこに映画論特有の難しさがある。

その上でバルトは、映画は演劇よりもむしろ文学に近いと述べる。それは「意味を宙づり」にするからだ。文学は問いを与えるが、答えを与えないように、映画も瞬間瞬間に意味を与えながらも、それらは決して収束しない。

い。バルトはフニエル監督『皆殺しの天使』を絶賛しながら、そこには何の意味もないが、だからこそ美が宿っているとする。

ドゥルーズの素朴

神話は現実化し、宙づりにされた意味が美を表す。しかし概念が現実化する世界は同時に、現実が虚構化する可能性をも孕んでしまう。「世界が出来の悪い映画のように思える」ならば、映画への信頼をもう一度取り戻さなくてはならない。ドゥルーズが『シネマ1・2』（法政大学出版）を書いたのは、そのような文脈が背景にあった。映画を見る、それは背景や意図を読むとは違ふ。

『シネマ』は映画を通して哲学書である。その根底にはリユミエール兄弟の発



外縁を／から読む：制作と批評

映画は本質的には娯楽である。であれば、制作であれ鑑賞であれ、その基準は映画の内

に求められると考えるのが自然であろう。とはいえ、何を面白いと感じるか、何を面白いと感じるか、それらはいずれも固有の諸状況＝歴史からの影響も免れない。

明から一年後に発刊された本、ベルクソンの『物質と記憶』がある。奇しくも同じ時間を辿ってきた二つの線はシネマで交差する。ベルクソンの「純粹知覚」、知覚することと存在することの結節点を、ドゥルーズは映画に見出す。

言っていることは確かに難しい、だが言わんとしていることはあまりにも素朴だ。映画を見ている時、私たちは同時に一つの経験をしているのだということ、一つの共有をしているのだということ。映画の意図を考えるのは、映画館を出てからでいい。そこには求めてやまなかった純粹な経験があるのだから。

神話は現実となり、現実を経験される。暗闇の中で、その光に照らされながら、私たちは今日も現実を重ねていく……。

（きもの）

う物語、作品という鏡像、制作という対象。外縁を／から読む、もう一つの愉しみへ。

作者という物語…制作（として）の個人史
作者なくして作品は成立しない。何を、どう表現するか、そのどちらが欠けても、作品を生み出すには能わぬ。ゆえに、その道程は時として想像を絶するほど険しい——映像作家、イギリス・ボラの迎ったそのように。その著書『きらめく拍手の音』（リトルモア）には、同名のドキュメンタリー映画の制作に至るまでの随想が綴られている。彼女は聾者の両親のもとに生まれた聴者…コダー（CODA）である。手と喉と、ふたつの声の中で育ち、それゆえそのどちらにも、完全には重なり得なかったその営みに導かれ「自然に、なるべくしてストーリー・テラーとなった」彼女の言葉は、その体験の感情を読むには十分すぎるほど横溢な詩性に満たされている。同時に、そこで語られるのは、その詩性、自らの「言語を探る過程」の原点であり、その過程でさらに深められた詩性が、一つの映画に結実するまでの過程でもある。両親が、自分が、生きる声と世界を、映像に表すこと。あるいは作品には見られない／見せない彼女自身の足跡も、人々の心を惹く映像と地続きに色鮮やかな、一つの物語に他ならない。

作品という鏡像…映画と／の中の社会

社会の不可分の一部である作者が生み出す以上、その作品は、作者の想像⇨創造に媒介された、社会のいわば鏡像でもある。その鏡像から、作品の奥の原風景と、作者の想像⇨創造それ自体を直観すること——『戦う姫、働く少女』（堀之内出版）が試みる「戦闘美少女の社会的分析」が目指すのはそのような地点である。著者河野真太郎はこのように「見る」…作品における「戦う姫」の像は、翻って現代社会における「女性の／と労働」をめぐる観念と状況の表象である、と。『エヴァ』から『インターステラー』へ、『魔女宅』から『千と千尋の神隠し』へ。ヒロインが携わる「仕事」は、その作品⇨社会の反転として読まれるのである。現代フェミニズム理論を参照しつつ提示される著者の洞察は、それ自体が刺激的な批評であるのみならず、映画がその外部を考える上でのエントリー・ポイントになりうることをも示しているよう。

制作という対象…批評との円環に向けて
沈思黙考のみが批評を導くわけでもない。「聖地巡礼」とは言い得て妙だが、作品の舞台を訪れ、撮られたようにその世界を見ることで得られるものもある。たとえばそれを映像に収めたら、それは批評か制作か、どう呼ばれるのだろうか。著者金子遊が自ら述べる通り『光学のエスノグラフィ』（森話社）

の「エスノグラフィ」（民族誌）とは比喩である。映像に触発され、自ら足を



運んで足跡を辿り、人々を映像に収め、その経験に依って批評する「名づけようのない行為」——そこでは制作と批評は渾然一体となっている。翻って、作者と観客の区分すら自明ではないと著者は言う…どちらも、映像に「生氣」があるような感覚を共有しているからである。では、その感覚はどのように作られるのか。作品に導かれるまま、その撮られた過程を追う「名づけようのない行為」は、しかしながら、映像が宿す生氣に、自らカメラを向け、その創造の過程を迫体験的に記録している点で、確かに「民族誌」を成している。いうなれば、それは映像の内部と外部との往還に他ならない。

映像の技法、共同制作の政治と倫理、鑑賞の哲学、外縁へのエクスカージョンと、そこから再び制作の現場へ——さて、惜しいが終幕である。ここから再度、特集の冒頭、映画の内部へと巻き戻して読み直すもよし、はたまた早速フィルムを回すもよし。いつもと同じように、あるいは違うように、一つ、感じられたら、なんと幸いなことか…「映画って本当にいいもんですね」と。

（侯爵）

新刊コーナー

マイクロスバイ・
アンサンブル伊坂幸太郎著
幻冬舎

ありふれた日本の風景に、挟み込まれるファンタジー。秘密の仕事とたよりない男。ああ、すぐさま読者は気付くだろう、これこそ伊坂幸太郎の文学だと。

有名会社の営業部に運よく就職した松嶋。彼が繰り返し訪れる猪苗代湖で、物語は展開される。福島県にあるその湖は、表紙イラストのごとく静かに伸びやかに描かれている。しかしその陰では、エージェント・ハルトをはじめとするスパイ達が暗躍していたのである。松嶋は気付かぬうちに彼らの任務に干渉し、またハルト達も松嶋に影響を及ぼす。一年ごとに積み重ねる物語は、やがて奇跡の瞬間へと近づいていき――。

猪苗代湖という舞台設定は、本作の成立に深く絡んでいる。各章の短編は元々、当地で毎年開催される芸術イベントで配布されるものだった。イベント参加者のみに渡されてい

た連作が、一つにまとめられ公となったのである。そうした背景もあって、実在のアーテイストの曲から度々歌詞が引用される。たとえば、〈プライドが何だ！ プとロとイとドだ！〉というフレーズ。プライドなど記号でしかない。そんなもののために争うくらいなら、風の吹くままに日々を愛でた方がいいだろう。こうした歌の言葉は物語全体に響き、明るいアンサンブルを奏でている。

刊行までおよそ七年。毎年欠かさず読んでいた人にも、初めて手にとる人にも、それぞれに楽しめる小説となっている。（とよ）

（一九二頁 税込一四三〇円 4月刊）

万感のおもひ

万城目学著
夏葉社

京大的作家の一人、万城目学は、本書の初っ端からこう告白する。曰く「執筆という作業はまったく楽しくない。もっぱら楽しいな内容の作品を書きがちなので、「著者も楽しんで書いてそう」というイメー

ジを読者に与えがちだが、どこい真実はエブリタイ

ム、私は仏頂面である」。本書が仏頂面で書かれたのか、それとも笑顔で書かれたのか、それは私の知るところではないが、私はなんとなく、本書は笑顔で書かれたような気がする。そう思わせる軽やかさが本書にはある。

本書は、著者がこれまで書き溜めたエッセイの中から選りすぐりのものを集めた傑作エッセイ集。「さよならして看」と題された文章では、撤去された立て看へのおもひが語られる。著者は学生時代、野放図に立ち並ぶ立て看を眺めることで、「ああ、アホが今日もアホしてる」という無形の安心感を得ることができた。しかし今や、立て看は消えた。それは失われた風景だ。しかも消えたのは立て看だけではない。「京都市内で京大生がアホをしても「京大ならしゃあない」と見逃してもらえる生ぬるい庇護、京大観光に行った人が「何か怖くて中に入れなかった」と感じる言葉にならぬ畏怖」、それもまた失われたのだ。もちろん、アホがアホすることで得られた無形の安心感は言うまでもなく……。

と、なんだか重たい話になってしまったが、本書は全体として、春の陽気を思わせる軽やかで心浮き立つエッセイ集となっている。本書を読む人はたぶん、エブリタイム笑顔でいることができるのではないかと思う。（はや）

（二七六頁 税込二七六〇円 5月刊）

引き出しに

夕方をしまっておいた

ハン・ガン著
きむふな 斎藤真理子訳
クオン



小説家としてハ

ン・ガンを知る読者

からすると、彼女と

詩とのイメーシはあ

まり結びつかないかもしれない。しかし、韓国語の音の美しさがそうさせるのか、実は韓国では詩が日常の生活に溢れている。著者が二十代の頃から書き留めていた言葉をまとめ、本書は彼女の最初の詩集となった。

涙は
もう習慣になりました
だけど、それが
僕を完全に飲み込んだわけではありませんが
その続く先には
見てください

僕は踊っているんです

——彼女が元来描き続けているテーマでもある、傷をもつ身体、憎しみや悲しみ、その先にただ生きる人々の姿。「回復」。生きる人々の痛ましさを刻銘に描写し、問題を解決するとも幸せになるとも限らないが、ただ、明日を迎える人間の様。苦しい、けど、彼女の根

底にもつ生活への愛が映る——

ごはんを食べなくちゃ

ハン・ガンの魅力は、人間の肉体的に鋭く向き合う繊細さと強さだけではない。子どもを眼差す彼女の詩は、愛と優さを写す。

だいじょうぶ

まだ海は来ないから

私たちをさらっていくまで

私たちはこうして並んで立っているから

子は、いつか大いなる母が自分よりも身長が小さいことに気付くだろう。彼女の言葉には、血と肉と、光と風が伴う。(トントウ)

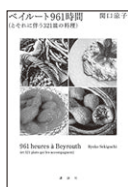
(一九二頁 税込二四二〇円 6月刊)

ベイルート961時間

(とそれに伴う321皿の料理)

関口 涼子著

講談社



本書は、食事と料理について記述することを通して、レバノンの首都ベイルートの肖像を描き出す、異色の「料理本」だ。

フランスで翻訳家、詩人、作家として活動する著者が、二〇一八年四月からの四〇日間のベイルート滞在に基づいて書いたエッセイで

あり、昨年フランスで発売され、本人によって日本語に翻訳された。

食事や料理にまつわる思い出をベイルートに暮らす人びとから聞き、食べる。それぞれの料理には、時代を経て様々な味が凝縮され、人々の思いも詰まっている。話を聞いて料理を味わうと、内戦や海外移住といった激動の日々を生き抜いた人びとの生活がたち現われる。さらには、日本やフランスでの著者の経験までもがうかびあがり、それらがまざりあって軽やかに綴られていく。著者がベイルートで食べた三二一皿の料理に合わせ、一ページにも満たない三二一編の文章が積み重なり、一つの作品となっている。

書き上げられた当初、本書は一冊の風変わりな料理本になるはずだった。しかし二〇二〇年八月四日、ベイルート港爆発事故が起こる。悪化の一途をたどる経済状況によって反政府運動が活発化しているさなかの出来事だった。この事故は、本書の持つ意味を大きく変えた。料理の記録は、カタストロフ前夜の光であふれていたベイルートの日常の記録へと変容したのだ。料理を介してアーカイブされている輝かしい日々、都市の活気、希望。ベイルートが蘇るその日まで、本書は色あせることなく人びとの姿を残す。(たいやき)

(二七八頁 税込二七六〇円 4月刊)

カルロ・ロヴェッリの
科学とは何かカルロ・ロヴェッリ著
栗原俊秀訳
河出書房新社

カルロ・ロヴェッリとは、現在第一線で活躍する物理学者である。アインシュ



タインとハイゼンベルクの理論を両立することとを目的とする量子重力理論が専門である。

『時間は存在しない』他、物理学書であるにも関わらず、詩的でかつわかりやすく、感涙を催すほどの文章力により、専門外の人にも広く著作が愛される作家としての一面も持つ。

本書は、彼の専門とする物理学よりもひとまわり大きい「科学」をテーマとする。「哲学」と「詩」を愛し、それらを通して「科学」を見つめる。この姿勢がロヴェッリの思考に他とは違う魅力を与えている。本書では、これまで以上にロヴェッリの思考の根源に迫ることができる。

アナクシマンドロス。古代ギリシアの思想家で、本書の主要人物だ。なぜロヴェッリはこの人物にスポットを当てたのか。この哲人が、神という絶対的存在が全(を)を支配する考え方から脱却し、世界で初めて「大地(地

球)が虚空に浮かんでいる」ことを見抜いたからだ。「上」に空、「下」に大地がある。「当たり前」の基盤を疑う。先人たちの「知」を批判したことでアナクシマンドロスを科学の革命家となった。科学とは、絶対的な確かさを求めるものではない。むしろ、科学が一步進む度、世界は新たな像を見せる。コペルニクスやニュートン、アインシュタインが示したように。そしてまさに今ロヴェッリが示そうとしているように。科学とは、人間が世界について考えるための方法を探索する、最も美しい冒険の一つなのだ。

(二七五頁 税込三三〇円 2月刊)

(黄丹)

チ。

—地球の運動について—(8)

魚豊著
小学館

人は何で「知」を求めるのだろう。時に死と直面し合理的とはいいたい人生



を歩みながら、それでも知を求めるのだろう。漫画「チ。」が遂に完結した。しかしそれは終わりを意味していない。次の人に渡ったのだ。

本書は二五世紀における天動説と地動説の

対立を扱っている。C教徒が全面的に信仰される社会において、天動説だけが本物であり地動説を唱える者は異端であった。拷問され迫害の対象とされる知をそれでも証明しようとする者達がいた。天動説から地動説への転換は、認識の転換だけではない、生き方の転換なのだ。神は天空にいるのか、神が創ったこの世界は美しいのか。命を懸けるだけの価値が、その知には宿っていた。

本書の主人公を一人あげるとするならば、異端審問官ノヴァクだろう。元傭兵がりの彼は拷問に長けていた。痛みを与え精神を追い詰め見せしめに殺しても、地動説を唱えるものが後を絶たない。彼の手は「血」で染まっていた。神のために働いているはずだった。誰よりも教会の為に血塗られた道を歩んできた。しかしそれ自身が間違っているのだとしたら……。夜空を見上げても星々は何も語らない、ただ美しく輝いているだけだ。地面を殴っても「地」は何も答えない、ただ朝を待っているだけだ。

あえて言いたい、研究者を目指す人に読んでもほしいと。知を志すとは信仰的行為なのだ。それは私欲を超えた営みであり、不確定な未来に託す一つの賭けなのだ。学ぶ意味に迷った時、この漫画を読んでもほしい。(きもの)

(二二七頁 税込七二五円 6月刊)

ゴルギアス

プラトン 著 中澤務訳
光文社古典新訳文庫



古代ギリシアで発達した弁論術は、演説によって相手を説得する術である。直接民主制であるが故に、政治・裁判に関するあらゆる事柄が人心掌握の巧拙に左右されたギリシャ社会。そこで生き残り、成功するためには弁舌こそ重視すべきだという見解に主人公ソクラテスが反論していく。

では、この『ゴルギアス』から我々は流麗な説得術を学ぶのか、否。著者プラトンが本書で投げかけるのは、「不正とは何か」、「善く生きるとはどういうことか」という問題だ。第2幕以降、ポロスとカリクレスとの対話で、ソクラテスは大きく二つの問いを発する。「最も悪いのは、不正をすることか、不正をされることか」。さらに、「不正が矯正されることか、されないことか」といふ問いがより悪いのか。不正は暴かれるべきでないと言え、若者二人。彼らは、言葉の力で不正を正にする方が不正を犯した人物にとって幸せだと言う。一方のソクラテスは、治癒されぬまま身体を

浸食していく病との比較によって、不正が矯正されないことで魂へ及ぼす悪影響を説く。そして、不正を正するためにこそ弁論術は使われるべきだと主張する。

ポロスとカリクレスが述べる見解の背景には、当時の思想的・歴史的对立があるが、そこには人間の不変的な悪の側面と欲情が垣間見える。それに対しプラトンが人々に求めるのは、理性に基づく秩序と調和（節度）だ。比喩と丁寧な定義づけによって、小気味よく進んでいくこの対話篇から、生についてプラトンとともに考えてみては……。 （はらん）

（四一〇頁 税込二二三円 5月刊）

七三部隊と大学

吉中丈志編
京都大学学術出版会



戦争中、満州で捕虜を対象に人体実験を行ったとされる通称七三部隊。統率

していた石井四郎は京大出身の軍医だった。戦後、彼らの戦時中の行為が話題に上がることはほとんどなく、復員してきた彼らはまた医師としてのキャリアを積み、医学界を牽引

する存在となった。彼らが実際のところ何をしていたのか、なぜそのような組織が成立したのか。そして大学と軍事研究とのつながりを現在の地点からいかにして振り返るか。本書では、第一次大戦など戦争の形式の変化と兵器の進歩という背景にも触れながら、論者たちがそれぞれの観点からこのテーマを掘り下げていく。

前半部をなす中国側からの詳細な資料読解は圧巻である。それを含めて見ていくと、東大、京大を通じて軍は医師を供給する人脈を大学の中に作り、医師の卵たちは確実なキャリア形成と国内では制限をかけられるような研究の機会を与えられたことが示される。外地で軍事研究の名の下に倫理を逸脱した行為が可能になった時、彼らは何をしたのか。

非人道的な人体実験と明言できる証拠はない。近年京大はそう述べて、七三部隊に所属した将校の提出した学位論文の調査を打ち切った。本書が、アカデミックの側からこのテーマを顕在化し、調査をきちんと行えるという印になれば大きな一歩と言えるだろう。GHQに七三部隊隊員が提出した証言の機密指定は解除されていると聞く。これから先、少しずつこの問題について解明されることを期待したい。

（五一一頁 税込三九六〇円 4月刊）

格差と分断／ 排除の諸相を読む

林拓也 田辺俊介・石田光規編著

晃洋書房



凡そ格差に言及せず社会を論じることなどできない。そのような意味で、多くの社会調査データを分析し、格差の実態の把握を目指す本書が、俗流格差論のそれ、「実証的な現状把握がおざなりなまま、論者ごとの主張したい言説やイメージが先行しているくらい」や、「本来は格差が強く影響している」と思われる社会問題が、別のフレーム（たとえば「男女間の意識の違い」、「民族的・宗教的対立」など）で語られることで、結果的に解決をむしう遠のかせているような例」への強力な解毒剤となることは間違いない。

更に、本書の特長は「社会における格差問題について、格差の形成要因と格差の影響という2つのテーマから論じた」点にもある。相対的低位階層における「ママ友」関係の困難や、低所得者の非投票行動が示唆する「隔離された存在」「日韓のナショナリズムの「中庸」と欧米型排外主義の近親性など、第Ⅱ部では格差の社会行動への影響が実証的に論じ

られる。また、随所で「意識」を扱う点も興味深い。第2章で示され、「おわりに」で再説される通り、本書の結論の一つは「社会関係を構成していく人々の営み自体が、社会的な序列構造を生み出す可能性」なのである。

他方、「弱い紐帯」の包摂機能など、本書の特に第Ⅱ部は、特に格差により生じた排除や分断をつなぎ止めるもの、もしくはその修復の機会となりうる対象「に着目する。格差の実像、更に展望をも提示する本書は、その自負の通り、「まさに現代社会の学術研究上の必要に応えた1冊」に相違ない。（侯爵）

（一九五頁 税込三三三〇円 2月刊）

離婚の文化人類学

現代日本における「親密な別れ方

アリソン・アレクシー著

濱野健記 みすず書房



家族の形態は国や地域によってさまざまであるが、多くの研究は家族の「つながり」に焦点を当ててきた。そんな中で本書はあえて、その対極として扱われる「別れ」を題材として取り上げる。

本書において繰り返し主張されるのは、

「つながる」とことと「別れる」ことは表裏一体の関係であり、別れたからといって繋がった関係が綺麗さっぱり消えるわけではないということである。著者は、離婚に直面する人々の語りを友人として聴く。ある時は嬉々とした様子で喫茶店に呼び出され、またある時は道端で突然、彼女あるいは彼らは語り始める。ふとした相手の言動がいかにショックであったか、結婚前の理想と実際の結婚生活がいかに乖離しているか、何が悪かったのか……など。このプライベートな語りの中には、性別役割分業をはじめとした伝統的な家族観・ジェンダー観が未だ根深いことが見て取れる。その一方で、就労環境の変化によって個人が十分に自立することも難しい。その結果、多くの語り手は、自立した個人同士の関係を希求しながらも、相手には従来の価値観に基づいた良きパートナーであって欲しいと望むという矛盾した状況に陥っている。

アメリカで出版された本書は、日本に住む人にとってありがちな話の一つかもしれない。だが、離婚した人々の語りは、依存から脱し自立した個人が推奨される現代において、その実現がいかに困難であることを示す。実際のところ、我々は多くの「つながり」と「別れ」の中で生きていくのである。（投稿・くがい）

（四二四頁 税込五二八〇円 4月刊）

学問と政治

学術会議任命拒否問題とは何か

芦名定道他著 岩波新書

二〇二〇年、日本学術会議新会員候補者のうち、人文系研究者六名が菅元首相によって着任を拒否された。この「学術会議任命拒否問題」から二年、政府は拒否理由をひた隠し、問題はうやむやのまま人々の記憶から消えつつある。しかし、当事者六名が問題の核心に迫ろうとする時、学術の領域を越えた現代日本全体への警鐘が今一度鳴らされる。

著者たちはこの問題から大学の、さらに学問と人文知の行く末を案じる。政府が介入を強め、軍事研究への参加を強いるような大学改革を実施した時から問題は始まっていた。改革による文系軽視は、既存の秩序と権力の歪みを照らし出す役割を担う人文知の冒険であり、今回の対象者が全員、人文系系であったことに繋がる。宇野はより踏み込んで、この問題が民主主義の腐敗を示唆すると言っている。学問の自由が否定されたことに加え、健全な民主主義において不可欠な力の分離、すなわち学術と政治の線引きが消されたのだと。

大学に身を置く我々は、決してこの問題の傍観者であってはならない。

(はらん)

(二二四頁 税込九二四円 4月刊)

ゼロから学ぶ量子力学 普及版

量子世界へのはじめの一步

竹内薫著 ブルーバックス

その名こそ事あるごとに耳にすれ、ついぞ手を伸ばせずにいた量子の世界へと踏み出す、その第一歩に本書を挙げる。この著作は量子力学を「ゼロから学」び、「シュレディンガー方程式」の意味理解を最終ゴールに目指す、やや本格的な一冊である。手始めに本文は、私たちが量子論以前の古典的イメージからいかに毒されているかを示すのだが、(高校物理すら履修しなかったコテコテ文系の) 評者にとって、電子を粒子でなく「波」と解する世界観はあまりに衝撃的だった。とはいえ、登場する術語や数式にはやさしく解説を加える叙述、ところどころに小さなコラムや「シュレディンガー」と題した短い対話篇も挿入する構成は、初学者にとって非常にありがたい。

……と、ここまで書いてはみたものの、ざっと一読しただけの評者は本書、そして量子力学に対する十全な理解にはまだ至っていない。なんだかよく分からないけれど、重大な真実がそこにはありそうだ——量子世界の奥深さのようなものを知られただけでも、本書を繙いた収穫としたい。

(投稿・東風)

(二八八頁 税込二二〇円 3月刊)

『パンセ』で極める人間学

鹿島茂著

NHK出版新書

「人間は考える葦である」。「クレオパトラの鼻。それがもう少し低かったら、地球の表面はすっかり変わっていただろう」。パスカルの言葉である。イメージが鮮明に浮かぶ。なんと強い力を持った言葉たちだろうか。『パンセ』の世界は、人間や世界についての思索が、豊かな言葉が溢れている。

本書では、著者が設定したテーマ毎に『パンセ』の百の断章が選択・配列されており、各断章に著者が簡明なコメントを付している。テンポよく、それでいてパスカルの言葉の深遠に触れられる書である。人間はなぜ気晴らしにふけるのか、人間は惨めか、偉大か。様々な「人間とは？」が、数学・物理学といった「抽象的学問」の天才でもあったパスカル独自のレトリックで著わされる。

ところで、「選択・配列」という本書の作り方は、『パンセ』自体にもあてはまる。『パンセ』はパスカルの死後、無秩序な断章の山から様々な人がいくつかを選択・配列して生まれた。『パンセ』の形は一つではなく、誰にでも「開かれた本」なのである。

(黄丹)

(二二二頁 税込九六八円 6月刊)

書き留めるところと——六〇年代の日米の女性の日記から

そこにあったのはただの記録なのかもしれないが、他人の人生が記録となって編まれる際、そこにうつるのは記憶であり、物語であり、未来への手紙でもある。ある二冊の日記本を取り上げながら、書き留めるところについて、思いを馳せてみる。

メイ・サートン著、武田尚子訳『独り居の日記』（みすず書房）は、サートンが五八歳の時に書き著した日記をまとめたものである。彼女の両親はベルギー人で、彼女が四歳のころにアメリカへ亡命した。演劇や詩に触れながら創作の道に向かっていくも、彼女が同性愛者であることを告白したのち、大学の職を追われる。そうした背景から、彼女は突然アメリカの片田舎に引越す。新しい物語の始まりというのは、全てが予定調和的に整えられるのだが、人生はそうもいかない。

九月十五日

さあ始めよう。雨が降っている。

決して孤独ではない、静寂。自己との対話を真摯に求める一方で、彼女は庭を飾り、近所の人と語り、時にパーティーに赴いたことを後悔しながら、時短や楽を求めない生き方を実践しようとする。それは、作家として「売れる」ために社会の波を敏感に感じ取らなければいけなかった彼女にとつての抵抗だったろう。

インスタントの成功は今日では当たり前だ。「今すぐほしい」と。機械のもたらした腐敗の一部。——だから、料理とか、編み物とか、庭づくりとか、時間を短縮できないものが、特別な値打ちをもっている。

サートンは物書きとしての誇りをもち、社会に対する鋭い目を持

ち合わせ、社会で自分には何ができるかを考え抜いた人だった。
女の生活はこまぎれである……

*

一九六〇年代後半、時を同じくして日本では武田百合子著『富士日記』（中公文庫）が書かれていた。作家の夫を持ち、自身も作家である彼女が、富士に別荘を買ったことをきっかけに、夫に山にいるあいだけ日記を書けと言われる。サートンが繊細な心の動き、社会への責任や悩みを描写していたのとは一風変わり、単に山での一家族の生活記録がここに綴られる。

八月二十八日（日）快晴

また夏が戻ってきたような快晴。洗濯ものを干していると、じんじんと暑くて気持ちがよい。うち中のふとんを干す。風呂場のスノコを干す。

朝、味噌汁、ごはん、卵焼、貝柱バター焼、漬物、わかめ酢のもの。

テラスに椅子を出し、主人の髪を刈る。

——こまぎれの生活が、こまぎれに、描写される。彼女の日々が言葉となって幾層にも重なることで、本書は大著となった。

ただ日常を記録しても、積み重ねは一つの演劇に様変わりする。人間が書きつけることは、相も変わらず天気と気分と人間関係のことである。しかし、書き留めるといふ行為で自己が崇高で趣深いものらしい、私たちは日記本に惹かれるようである。とはいふものの、隣の恋人の日記はみてもいいものではない。時が経てば、その書付が美しくも見えるのだろうか。（トントウ）

リルケの手紙を読むために——光彩を放つ群星の背後にひそむもの

「リルケはひとつの巨匠のように、ひとつの仕事のように手紙を書いた。彼の手紙はいわば、外側にむけて、他者にむけて書かれた日記だ」——今はもう絶版となってしまうが、今からおおよそ半世紀ほど前に、人文書院から『リルケ書簡集』と題された分厚い二巻本が出版された。『マルテの手記』や『ドゥイノの悲歌』で名高いリルケは、その生涯で約三千通の手紙を残したが、本書にはその内、五七五通の手紙が収録されている。二巻合わせて千頁を優に超える本書のずっしりとした重みからは、リルケの人生の重みが苦しいまでに感じられる。苦悩に満ちたリルケの人生、そしてその重み——。

冒頭で引いた一節は、本書の月報に記されたもので、リルケにとって手紙が持つ意味をずばりと見事に言い当てている。他者を通じて自己を深めること、それがリルケの流儀だった。それゆえリルケは、自己の内面を、日記ではなく手紙に書きつける。「私はまた手紙を精神交流の一つの手段、最も美しく収獲多い手段の一つと考えている旧式な人間の一人です」——『若き詩人への手紙・若き女性への手紙』（新潮文庫）でこう語るリルケにとって、誰かに手紙を書くことは、比類なき意味を帯びた行為だった。リルケの手紙を読む者は誰しもが、この「旧式な人間」に憧れを抱くのではないだろうか。たしかにそれは失われたものへのたんなる憧憬にすぎないのかもしれない。しかしやはり手紙を書くことをやめた私たち「新式な人間」からは、何か精神的な豊かさのようなものが失われたように思えてならない。「新式」が「旧式」につねに優るとは限らない。リルケという異界の随伴者——志村ふくみ

それを読む者みなを酔わせるリルケの手紙だが、この美酒にも似

た手紙を味う上で、是非とも紹介しておきたい一冊がある。志村ふくみ著『薔薇のことば』（人文書院）である。著者は、稀代の染織家であると同時に、稀代の随筆家でもある。優れた美的感覚と詩的感覚を持ち合わせた著者は、本書を通じてリルケの手紙を読み解くことで、その苦悶する内面に迫っていく。リルケの手紙と偶さか出会った著者は、それを「乾いた地面に雨が降りそそぐようにすぐさま読み耽った」。同じく芸術にその身を捧げた者として、志村はリルケに何か共振するものを見出したのだろう。異界を旅するダンテにウエルギリウスが随伴したように、リルケという広大無辺な異界を旅する私たちには志村ふくみが随伴する。これほど心強い随伴者はそうそういない。



光彩を放つ群星を生み出す暗がり——手紙を読む意味

本書ではとりわけ、次の一文が印象深かった。曰く、「まことに天才は剥りがたい。生身の人間であることを忘れて、われわれはその作品のみをみとめようとするが、その背後に傷だらけのみじめな人間がじっとたたずんでいる。黒い鉄格子のはりめぐらされた現世の暗い室内から、夜空に時折光彩を放つ群星のような詩が生れるのだ。その群星のみを知っていればよかったのか、充分だったのか。いや、そうではない。幸か不幸か、私はこの書簡集に出会ってしまった。著者は手紙の中に見てしまったのだ、光輝く華麗な詩の背後にじっとたたずむ、傷だらけのみじめな人間としてのリルケの姿を。詩を読むだけでは見えてこない、リルケの生々しい姿がここにはある。リルケその人に触れるなら、まずは手紙を読むことだ。（はや）

編集後記

全てを捨てて、どこか、遠くに行きたい。そう思って、学部生のころ、何とはなしにフィンランドに留学しました。皆で高い木々に囲まれた湖で泳ぎ、ヘイッキは薪を割ってお家のサウナを温め、リーサと私は森の木の実を摘んでジャム作り。あののどかな夏の日々と人々に魅せられて、帰国後から今まで北欧の研究にのめりこみ、今夏からスウェーデンのウプサラに行くことになりました。

‘Ett liv utan kärlek är som ett år utan sommar.’
——愛のない人生は、夏のない一年のよう。

スウェーデンのことわざの一つに、こんなものがあります。暗く寒い日々を耐えながら暖かい太陽を待つ北国の人々にとって、夏はとっても大切な季節なんです。太陽を浴びるために、友達とお喋りも外でします。自立を重んじ、知らない人にそんな気軽に笑いかけたりしないような北欧社会で、愛が、あの夏ほどに彼らの拠りどころになっているのかと思うと、なんだか、どんな人間だって、脆くていじらしいんだなあ、なんて。

新しい世界に飛び込む不安や恐れ？ もちろん、ある。でも、あればあるほど私は楽しめます。だって、それを乗り越えたら、私を主人公にした、とても素敵な物語ができあがると思えるから。(トントウ)

当てよう！ 図書カード

今月の特集は映画でした。京都にはミニシアターが多くあり、大手映画館では上映されないようなマイナーな映画が週替わりで上映されています。ここで問題。かつて京都には廃校になった小学校を活用したミニシアターがありました。その小学校とはどこでしょう。

1. 明倫小学校
2. 立誠小学校
3. 籠池小学校
4. 開智小学校

(たいやき)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは9月15日です。



《5月号の解答》 5月号の問題の正解は、1. の志賀直哉でした。小説の神様とも言われる彼は、中等科時代、品行が悪く二度も落第したそうです。生い立ちを知ると何だか神様って身近に感じられませんか。図書カードの当選者は、五穀豊穡さん、みどりさん、麻婆さん、キリンカバさん、とびおさんの5名です。当選おめでとうございます。

(トントウ)

読者がらひゅう

○あまり読書をする方ではないのですが、またまた手に取った書評を通して読んでみたくなりました。

(医学部・しおん)

——ありがとうございます！ 私も、大学二年生まで本を全然読んでいませんでしたが、ある本をきっかけに本を読むようになりました。『綴葉』が、しおんさんとすてきな本とを繋げることができたら嬉しいですね。

○教科書以外あまり本を読めていないので、試験が終わったら本を読みたいです。

(法科大学院・真つこ)

——おつかれさまです。せっかくなので、試験後は分野違いの本に触れてみるのはいかがでしょう。慌ただしい日々にも読書の時間を作れたらいいですね。あ、レポートが……

訂正とお詫び

『綴葉』6月号(No.408)の最新刊紹介において、一二頁『マキアヴェッリの独創性 他三篇』の編訳者名に誤りがありました。正しくは、「川出良枝」です。訳者の方をはじめ、関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

お知らせ

メールアドレスが変更になりました。詳しくは表紙をご覧ください。(トントウ)